城下町探訪３２ ２００９／１１／５	銭座が松本にあった

１．銭座記念碑

松本市民芸術館の南側に写真の「銭座記念碑」が建っている。昭和４３年に、寛永１４年（１６３７）から寛永１７（１６４０）年まで松本に「寛永通宝」を鋳造した松本銭座があった証しとして建立されたものである。松本市民芸術館が出来る前は市民会館北側にあった。

銭座は「鍋屋小路」にあったことは分かっているが現在のところ、発掘等により正式な位置は確定されていない。

したがって、芸術館付近に松本銭座があったということではないのです。

２。松本で寛永通宝が鋳造された歴史的背景

江戸幕府は慶長１３年（１６０８）永楽銭の廃止を打ち出し、前代以来通用していた鐚銭（びたせん）の一律通用を命じた。幕府が公鋳銭である寛永通宝を発行するに際して寛永１３年6月１日発した令では新銭（寛永通宝）は金一両に付き 4 貫文（4000 文・　寛永通宝 4000 枚）に売買すること、新銭は江戸と近江坂本で鋳造する。他の場所では一切の鋳造を禁止するというものでした。

統一政権が出来るとその威光を示すために、度量衡（どりょうこう）や貨幣制度を整えることが急がれるのは言うまでもないことです。江戸幕府の貨幣制度は金貨・銀貨・銭貨の三貨の間に交換比率を定め併用させるというものでした。慶長 5 年（１６００）・6 年から金座・銀座を通じて、慶長金銀の鋳造を開始し、寛永年代及び寛文年代にいくたびか銭貨が増鋳されて幕府の貨幣制度が確立されていくのです。幕府の基本通貨の役割を担っていたのは金貨と銀貨であり銭貨は事実上少額な補助貨幣でした。

寛永 13 年に足尾銅山等の銅の生産が増加したことを背景に幕府は本格的に寛永通宝の鋳造を開始しました。寛永 14 年には寛永通宝を全国に流通させるために上記２ヶ所に加えて水戸・仙台・三河吉田・松本・高田・長門萩・備前岡山・備後竹田の八ヶ所の鋳銭所が増設されました。（この計画は寛永 13 年末には決定されていた）更に寛永 16 年（１６３９）には駿河井之宮にも銭座が設けられました。流通のために十分な量の寛永通宝を確保するために取られ措置である。松本が選定された理由としては本州内陸部の銭貨幣流通をはかるためであったと考えられています。

松本市立博物館蔵松本銭

松本銭（拡大）

３　今井勘右衛門鋳造を願い出る

昭和８年刊の松本市史には「寛永十三年（松平）直政は幕府の特命を受け、松本に於寛永通宝銭を鋳造す。請元は**今井勘右衛門**にして、鋳工は**三輪忠兵衛**なり、又其銭座工場は**鍋屋小路**なり。」と記しています。松平直政が幕府の特命で松本に銭座を開設した事になっています。しかし、寛永１３年１２月２７日今井勘右衛門当ての銭座許可書には「信州松本に於いて新銭座望み申し付けられて､その方より書き付けを取り、申し付け候、相違なくきっと用意候て、鋳立てらるべく候・・・」とあり、七名の奉行人が連署している。このように松本では町役人今井勘右衛門が出願して新銭座を起こしている。勿論、松本が選定されるには将軍家光の従兄弟である直政の存在が作用していたことは十分考えられます。

銭座も金座や銀座のように幕府直営のように考えられがちですが、江戸の前期には銭貨の鋳造は民間の商人等による請負事業であり､幕府の許可制でした。銭貨の需要が生じたとき幕府は随時、鋳造希望者を公募して銭貨鋳造の力を持つ者を期限を区切って鋳造を命じたのです。（明和２年以降は金座・銀座が銭貨鋳造を兼任することになる）

４　銭座工場は鍋屋小路にあり

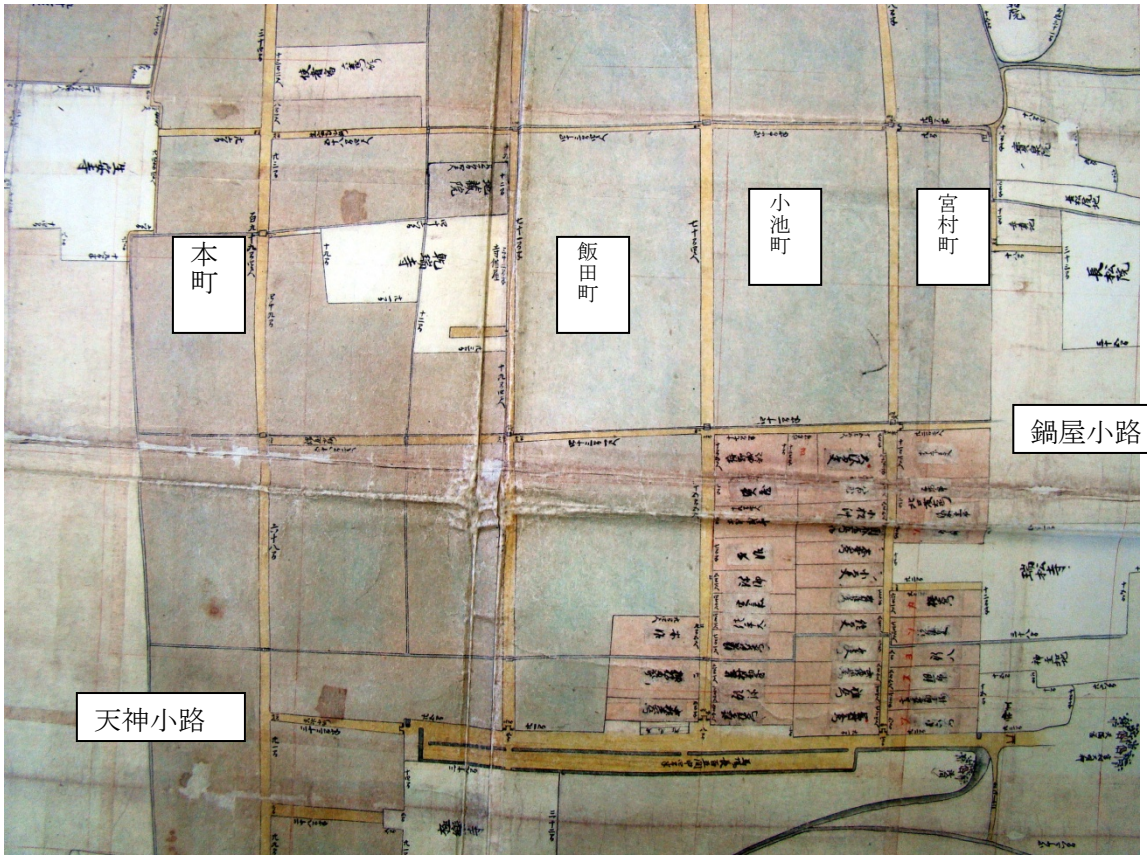
実際に松本銭を鋳銭した技術者は三輪忠兵衛が率いる鋳工たちでした。この間の鋳造に関する史料は発見されていないため、原料の仕入れ先・行程・施設・生産量等は不明です。水戸や萩に残された関係資料からは幕府は「銭の元」と言われる手本銭を交付してそれを型にして鋳造されました。「国史大辞典」銭座の項目から施設や運用の箇所を引用すると以下のように書かれています。

「銭座には支配人の下に､地金（じがね）を作る大吹所（おおぶきしょ）と鋳銭と仕上げの行程を担当した銭吹所とがあり､外に種小屋、鍛冶小屋、行司場などの施設も付属していた。銭座で作られた新銭は

公定相場のある場合はその相場で、また、ないときは時価を以て売り出されたが、請け負った時の契約に従い運上を幕府に納入した。（出来高の１０％前後）鋳銭が順調に行われた場合は､銭座には莫大な利益があった。」

松本銭座もこのような施設があり運営されていたと推察されます。

鍋屋小路は下のように享保十三年秋改松本城下絵図に示されるようですが、この小路を飯田町・小池町・宮村町が南北に貫いています。道幅は２間でした。



鍋屋小路（なべやこうじ）の名称の由来について旧松本市史には「田中・濱・三輪・戸田の四軒の鋳物師屋（いもじや）ありて鍋屋小路と呼びしよりの名なり」とあります。「東筑摩郡・松本市・塩尻市誌歴史下」は松本の鋳物師について次のように記しています。「宝暦年間の家並絵図には飯田町に鋳物師薬罐直し（やかん）３人・鍋屋３人。宮村町に鍋屋１人とあり。寛文年間・享保年間の家並絵図には鍋屋伝右衛門・鍋屋伊右衛門・鍋屋忠兵衛の名前が見える。また元禄１２年極楽寺の鐘が完成するが、そこには松本城下の鋳物師、三輪・濱・田中・小野の名前が記されている。濱石見と田中弦右衛門はともに河内の国丹南郡の鋳物師で元和８年（１６２２）に飯田町鍋屋小路に住み、極楽寺・念来寺・浄林寺･宝永寺等の鐘を鋳造している。濱氏は天正１２年（１５８４）小笠原貞慶の招きで飯田町に住み信州ならびに他国の寺の梵鐘を多数鋳造している。」

こうした技術的な蓄積のある鍋屋小路が銭座の中核を担ったのは十分に頷けます。

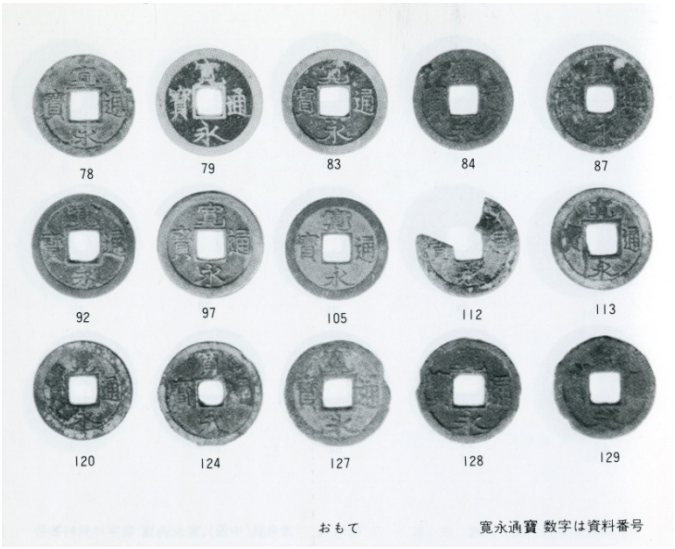
５　寛永１７年松本銭座解散の理由

松本銭座は寛永年１７年解散しています。松平直政が松江へ１８万６０００石で転封していくのが寛永 15 年で、その２年後、松本銭座が閉鎖されてますが、銭座閉鎖と直政の移動とは無関係であると考えられます。寛永 17 年（１６４０）前年に銭貨の相場が下落します。寛永 13 年「寛永通宝」を鋳造し始めたときは銭一貫文（1000 文）と銀２４匁の交換比率であった。銭座が前述のように各所に作られ銭貨が増産された結果、寛永 16 年には銭１貫文は銀１６~１２匁での交換となり銭貨相場が下落しました。(「米と江戸時代」　雄山閣２２０ｐ）このこと等により全銭座に鋳造停止が命じられたのです。「国史辞典」寛永通宝の項目からこの理由を述べている所を以下引用します。

・・「萩藩江戸留守居役福間彦右衛門の（福間牒）の寛永十七年十一月二十二日の記事によると「近年諸国にて寛永の新銭仰せ付けられ候（そうろう）ところに、いずれも沢山に鋳出し、もはや御用無（ごような）しに候条（そうろうじょう）、国々鋳銭きっと差し留め、鋳させ申す間敷（まじ）き」旨（むね）おおせ渡たされた。そして、他の銭座とも同様であったと記している。」・・

このように銭貨の増鋳が行われ、流通のために十分な量の寛永通宝を確保するために取られた銭座の設置がこの時点での役割が終わったことを意味しており、松本銭座の閉鎖はこの様な事情によるものであったのです。

参考　松本城二の丸御殿跡から発掘された寛永通宝。松本銭は発見されなかった。



参考文献

「概説日本経済史」　　１６０ｐ
「米と江戸時代」　雄山閣２２０ｐ
「貨幣の日本史」朝日選書
国史大辞典
図説国宝松本城　一草舎
松本市史上・下（昭和８年刊）
松本市史　歴史篇Ⅱ近世
東筑摩郡･松本市･塩尻市誌　第２巻歴史下
シリーズ藩物語　松本藩　　現代書館
松本城二の丸御殿跡発掘調査・史跡公園整備